

仏像と地域史

—和歌山地域彫刻史の研究—

大河内 智之

序章「仏像の移動とその実態—仏像・神像から地域史を読み解くために—」

仏像や神像などの彫刻資料は、大抵の場合、移動することが可能である。そして、造像以来、安置場所を違えずに現位置を保ち続けたかどうかを、直接的に証明する資料に恵まれないことも多い。それゆえにそうした資料を、伝来した「場」の歴史と関わらせて考察することや、また逆にそうした資料から、伝来した「場」の歴史を再構築するためには、慎重な手続きが必要となる。

こうした問題は、地域の中に残された仏像や神像を、地域に即していかに評価するかという課題意識のもとで前景化するものといえ、八尋和泉氏の先駆的な研究（『九州仏像の現所在と原所在—造立時の寺院を離れた仏像五例—』『九州歴史資料館研究論集』9、1983年）があるが、課題が共有されている状況ではない。

学問領域としての日本美術史は、近代期初頭に、国民国家の文化的統合の装置として成立、機能し（北澤憲昭『眼の神殿』美術出版社、1989年ほか）、天皇制の確立に絡む国家のさまざまな歴史遺物保護の動きの中で、美術史研究自体が国家の権威に基づく古美術保護（指定）のための資料提供と価値判断の役割を相互補完的に機能してきた（佐藤道信『明治国家と近代美術—美の政治学—』吉川弘文館、1999年、ほか）。こうした「国家の美術史」の中では、日本「独自」の美術様式の発展とその達成について分厚い研究蓄積がある一方、周縁部やマイノリティーの表象、民衆文化などが評価されにくく、戦後においても、皇国史観にかわる新たな歴史観の支柱が現れなかったといえる日本美術史においては、戦前までに諸作品によって組み上げられていた史的体系を引き継ぎながら、現在も研究の枠組みが維持されている傾向にある。

日本美術史の一分野である日本彫刻史においてもまた、彫刻資料の国家による指定と保護のための基礎作業が、戦前・戦後を通じて研究推進の原動力であり、例えばそこでは鎌倉時代を「我が国固有の彫刻を完成」した時期とし（国立博物館編『日本美術略史』、便利堂、1950年）、それ以降を彫刻の衰退期として捉えており、多くの江戸時代彫刻を含む庶民信仰の仏像や、民間の諸芸能の仮面資料、人形がほぼ研究の対象と見なされておらず、戦前の研究で構築されてきた評価の枠組みは今なお強固である。

こうした戦前までの研究の総括の機会を得ずに踏襲されてきた「国家の美術史」においては、中央集権的な国家観を背景に構築された中央—地方という枠組みもまた維持され、「中央」の「洗練された」彫刻様式の変遷が緻密に把握される一方で、周縁地域の作例は研究対象として評価されにくく、「地方仏」あるいは「地方風」などの言葉が研究上の用語としても用いられている。しかしこの「地方仏」「地方風」という用語は、「都ぶり」に対する「鄙び」と同様に、優劣・上下の区別を前提としているし、それゆえにそうした見方に対してのアンチテーゼとしての「地方仏」研究も行われた。

日本彫刻史研究の上において、この中央—地方という視点は現在も踏襲され、克服されているとは言えないが、近年における作例研究の深まりは、そもそも単純な一つの「中央」の想定自体が困難になっていることを示しており、そうした「中央」をも一つの地域と位置づけて、各地域に根ざした作例研究の積み

重ねの中で地域様式を捉え、相互の関係性を評価していく、より水平的な研究態度が求められるものとする。こうした研究態度において、日本の各地域ごとにおける作例研究の必要性は益々高まるものといえるし、またそうした研究が、美術史の領域に留まらず、関連研究領域においても共有されうる水準であることもまた、求められよう。

地域に残された仏像や神像が、地域における様式研究及び地域史叙述のための重要な資料となる上においては、それらがいかに地域性を保って伝来してきたのかについての見通しを立てる必要がある。こうした課題に対して、実際に元の安置場所より移動したことを確認できる仏像に着目し、その移動・非移動の条件を把握する作業を、14件の事例により行った。結果、仏像の異動の類型を次のようにまとめた。

- I、寺院の外護者となる地域の政治権力との関わりによる移動
- II、地域の政治権力の再編に伴う寺院の没落・廃絶による移動
- III、信仰の場の断絶後、需要に応じて移動
- IV、神仏分離による信仰の場の断絶による移動
- V、城下町等の整備と再編に伴う移動
- VI、本山末寺等の関係性の中、需要に応じて移動

やや重なる要素もあるが、こうした類型化によって、地域における仏像の移動の諸相が捉えられる。そしてこれらの移動には、次のような傾向があることが理解された。

- i、多くは信仰の場の断絶という特殊な状況に基づいて、仏像が移動する事態となっている。
- ii、移動する場合も地域性を失わず、同一荘園や同一地域内で移動する事例が多く見られる。
- iii、需要に応じて移動する場合、地域性を失って移動する事例がある。

こうした分析により、仏像の移動は多くは信仰の場の断絶という特殊な状況において発生し、かつ移動する場合も地域性を失わず、同一荘園や同一地域内で移動する事例が多く見られることを確かめた。すなわち地域の中で伝えられている仏像や神像など彫刻資料は、特定の寺社とのつながりや伝来史を明確にできない場合でも、所在する地域の歴史を物語る資料となりうるといえる。こうした前提をもとに、以下の和歌山県内の3つの地域を設定し、考察を行った。

第一部「高野山麓の仏像・神像と地域史」

第一章 高野山開創縁起から見る聖域としての高野山麓

第二章 薬師寺・大福寺の仏像群と感応山—高野山開創縁起に基づく聖域の復原—

第三章 法福寺阿弥陀迎接像について—高野山膝下における浄土信仰とその場—

第四章 成立期の丹生高野四社明神像について—鑄造神像とその原型—

高野山開創縁起に語られる丹生明神・高野明神によって弘法大師に布施された神領の範囲分析により、高野山麓一帯を高野山文化圏としてまとまりを持つ地域として設定した上で(第一章)、かつらぎ町御所薬師寺・同星川大福寺に伝来する平安時代の仏像群を一括的に捉え、江戸時代における伝承を踏まえ、忘れられていた廃絶寺院感応山寺を復原し、当地が高野山の聖域の北西端であることを明らかにした(第二章)。こうして把握された聖域を踏まえ、その南西端にあたる生石ヶ峰と一体の山塊である堂鳴海山に所在した廃絶寺院慈恩寺から伝来し、従来その造像背景が不明であった法福寺阿弥陀如来と菩薩の群像について、高野山の聖域の西端という象徴的な場で機能した阿弥陀迎接像であることを明らかにした(第三章)。最後に「丹生大明神告門」に丹生明神の降臨地と語られるかつらぎ町三谷に伝来した神

像を分析し、同じく鎮座地である天野・丹生都比売神社祭神像と木型・鑄造像の関係にある希有な作例であることを明らかにして、現存最古の丹生高野四社明神像として位置づけるとともに、天野地域と三谷地域の密接なつながりを示した(第四章)。

第二部「熊野三山の仏像・神像と地域史」

第一章 熊野地域の聖地形成と熊野信仰の展開

第二章 熊野の神像とその図像継承

第三章 滝尻王子の滝尻金剛童子立像について

第四章 東光寺不動明王二童子像と熊野本宮

古代における熊野地域の聖地形生の経緯と、中世の熊野信仰の成立と展開について概観した上で(第一章)、熊野地域に分布する平安時代前期～中期造像の神像(熊野速玉大社、熊野本宮大社、熊野三所大神社、熊野那智大社の各神社所蔵)を紹介し、そのうち熊野速玉大神像と家津御子大神像の図像的特徴が各社で共通することから、それが地域性を帯びた表現であるといえ、これら神像が造像以来熊野地域の中で伝来してきたことを示すことを明らかにした(第二章)。次に熊野参詣道沿いの信仰拠点である王子社祭神滝尻金剛童子像についてもその図像的特徴に注目することで、その姿が熊野の神域の結界を守る武装神像として設定されており、またそうしたイメージが地域における武士の信仰言説(秀衡伝承)の形成に結びついた可能性を提示した(第三章)。最後に、湯峯温泉東光寺に伝わった不動明王二童子坐像についてその像内銘とともに検討し、その伝来情報の博搜により江戸時代の神仏分離により熊野本宮より伝来した資料であったことを明らかにした上で、従来不明であった寛正年間における本宮の火災とその復興造営の状況を復元的に考察した(第四章)。

第三部「荘園・村の仏像・神像と地域史」

第一章 靱淵八幡神社の八幡三神像について

第二章 伝法院の大日如来坐像について—鎌倉時代後期・根来寺周辺の造営活動—

第三章 宝勝寺十一面観音坐像と南北朝時代の安宅荘

第四章 歎喜寺地藏菩薩坐像(胎内仏)について

第三部では紀伊国内における荘園や村という地域的まとまりに着目して、四つの地域を取り上げた。第一章では石清水八幡宮領靱淵荘の荘鎮守、靱淵八幡神社の八幡三神像を靱淵荘の成立段階に遡る資料として位置づけ、石清水八幡宮の荘園経営の実態を明らかにした上で、その図像的根拠となった、今は失われた石清水八幡宮の神像の姿を復原した。第二章では大伝法院(根来寺)領山東荘内の伝法院に伝来した大日如来坐像を通じて、鎌倉時代後期における大伝法院(根来寺)勢力の高野下山のち、寺領荘園内の寺院造営による支配強化が図られていた実態を把握した。第三章では日置川河口部安宅荘内に立地する宝勝寺の十一面観音坐像について、像内銘の分析と、同一地域に伝来した同時期の作例の一括把握を通じて、地域支配に関わった安宅氏による荘園開発の実態を提示した。第四章では、石垣荘歎喜寺村(吉原村)の歎喜寺に伝来する地藏菩薩坐像について、地域の武士団湯浅党が造像に関わった類似作例との比較により、歎喜寺創建期に湯浅宗氏が関与して靱仏に納置された経緯を復原した上で、江戸時代に像内より発見されたのち近世、近代を通じて地域住民の手によって手厚く守られてきた具体的な状況を提示した。

終章 仏像と地域史

第一部～第三部における考察を行う上で用いた研究手法は次の通りである。

- ①資料の形状・構造・様式的特徴に基づく制作時期の判断（全章）
- ②伝来史の博搜（一部二章、一部三章、一部四章、二部四章、三部二章）
- ③銘記の分析（二部四章、三部三章）
- ④作品群の一括把握による資料化（一部二章、一部三章、二部二章、三部三章）
- ⑤図像的特徴の比較と類型化（一部四章、二部二章、二部三章、三部一章、三部四章）
- ⑥伝来した場の歴史・環境と資料の象徴的機能の整合化（全章）

このうちの⑥が、仏像・神像から地域史を読み解くという本論主題を概念化したものである。このように整理した上で、あらためて2つの地域の仏像（二章第1節「かつらぎ町教良寺・阿弥陀寺の仏像と地域史」、第2節「紀の川市・中津川行者堂（極楽寺）の仏像と地域史」）を取り上げ、場の歴史・環境とそれら資料の象徴的機能を整合させることで、当該の地域史叙述のための核となる資料たりうることを提示した。

以上本論においては、地域において伝えられてきた仏像や神像について、彫刻史的方法論により適切に資料化を図った上で、伝来した場の歴史・環境と、それら資料の象徴的機能を整合させることで、地域史の新たな一面を叙述しうることを明らかにした。事例として紹介したのは全て和歌山県下の作例であり、仏像と地域史という主たる論旨とともに、和歌山地域彫刻史研究としてのまとまりをも提示した。

地域史研究における「地域」は、「地方（ローカル）」、「地域（リージョン）」、「広域地域（エリア）」に区別され、大きな容れ物や場として、独自の歴史的ダイナミズムを示すきわめて求心力の強い一つの単位として、また外に向かって広がってゆく緩やかなネットワークの様相をみせる広がりとされる（濱下武志・辛島昇「地域の世界史」の視点と方法（同編『地域史とは何か』、山川出版社、1997年）。本論で設定した「地域」はリージョンやエリアであり、そうした空間的広がりの中に所在する仏像・神像を通じて、まさに歴史的ダイナミズムの一端を把握することに努めた。

はじめに示したように中央集権的な国家観に基づく中央—地方の評価の枠組みでは、中央からの様式の伝播とその受容のあり方は把握される一方で、その評価が造形上の洗練—非洗練の判断に留まる傾向がある。そうした評価の中ではこぼれ落ちる人々の記憶の断片が、仏像・神像には多数蓄積されている。そうした記憶（歴史）の再発見を通じて地域性が浮かび上がり、従来自明ではなかった忘れられた「地域」が立ち上がる事例も確認された（一部一章～三章）。

仏像や神像が持つこうした資料価値への視点は、当該地域の歴史を証明する根拠として、それら仏像・神像を地域内において維持・継承するための理論的、心情的な裏付けともなる。地域における自立的な彫刻史研究の重要性は、こうした観点から極めて高いものと考えている。

仏像から見る地域史とはまさしく、仏像とつながり、そして仏像を残し続けた人々の生きた痕跡を、仏像から読み取るということにほかならない。本論で示した研究手法は、日本彫刻史研究の裾野を広げるための、新たなまなざしの提示につながるものと考えている。